江戸川大学学生新聞

THE EDOGAWA TIMES

VOL.7 #19
2017年12月9日（土）

取材／編集：学生記者クラブ
発行：江戸川大学企画総務課

『習近平の中国はどこへ行く？』毛里和子さん

『中国外交を読み解く　～習近平時代』宮本雄二さん

駒木祭 特別シンポジウム
中国外交・政治の第一人者が講演
「中国のいまを語る」

元駐中華人民共和国日本国大使
宮本アジア研究所代表
宮本雄二さん
早稲田大学栄誉フェロー・名誉教授
中国・華東師範大学顧問教授
毛里和子さん

11月3日、江戸川大学メモリアルホールで特別シンポジウム「中国のいまを語る」（主催 江戸川大学駒木学習センター、後援 流山市教育委員会）が開催された。ゲストには宮本雄二さんと毛里和子さんを迎え、コーディネーターは本学メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科の大江志伸特任教授が務めた。（取材・文：佐藤耀　撮影：小川茜）

コーディネイターは大江志伸特任教授。

このシンポジウムでは、世界において日本はどうあるべきかが議論された。

毛里さんによると、中国共産党の最高指導者である習近平体制のもと超大国へとひた走る中国の「いま」を明らかにし、これからの習近平は「強い中国」をスローガンに掲げ、急速な経済成長と、自国の取り戻すべき場所は軍事力を発揮してでも取り戻すという考え方のもと軍事力拡大を主導している。これが今日における日中関係の冷え込みに繋がっていると指摘する。さらに現在、日本と中国は「競争」と「対立」の時代にある、特に外交面での両者の対立は顕著であることを問題点に挙げた。

中国は南沙諸島において他国の非難を無視して人工島を建設し軍を配備し、力を用いた強硬的な手段を取っている。これは「覇権主義」と呼べ、中国は覇権主義的外交政策にひた走っていると言われている。

一方、宮本さんは習近平の望む外交は「義利観外交」だと言う。これは中国の古くから存在する伝統的な価値観や文化に基づき、みんなのために正しいことをする、という考え方だ。

鄧小平から胡錦濤が中国共産党の最高指導者だった頃までは、国際的な協力関係が不可欠であると考え、義利観に基づいた外交色が濃かった。だが、相手の主張を一方的に受け入れるような弱腰の外交姿勢を取ると中国国内の政治家や国民から反感を買ってしまい、失脚に繋がってしまう懸念もあった。

そのため、習近平は強硬的な姿勢を崩さず、日中外交においても親日的な態度を取ってこなかった。そのことが日本の安保法案可決や日米同盟強化の一因にもなっている、と宮本さんは指摘する。

しかし毛里さんは、10月に行われた第19回中国共産党全国代表大会は冷え切った日中関係を改善させることができるかもしれない、と期待する。習近平は側近人事を自身に近い考えを持つ人物で固めた。これまでよりも習近平に権力が集中し、そのことで周囲からの反発がなくなる。

つまり、自分の望む外交、「義利観外交」ができるようになり、日中関係にとってプラスに働くのではないか、ということだ。

最後に、会場から「現在、軍事活動を活発化させている中国に対して、日本は今後どのような姿勢で臨めば良いのか」と質問があった。これに対して宮本さんは、「日本も軍事力で対抗するのでは日中関係改善には繋がらない。日本が戦後70年で培ってきた文化力、特に現在であればアニメといったソフトパワーで臨むべきだ」と提案した。